

## 「座右の銘」 Favorite Motto

ヨーク大学日本語科主任

太田徳夫

今の若い人はどうか知らないが、人それぞれ自分の好みの格言・名言・警句などを持っているものである。それらはその個人の考え方や人生に対する態度などを示すという点で興味深い。日本語にあるこの種の表現は中国の故事また韻文に由来するものが多いが、西洋にも非常に多くの名句・名言がある。ドン・キホーテの「ローマは一日にして成らず」、パスカルの「人間は考える<sup>あし</sup>葦である」、トルストイの「愛は<sup>お</sup>惜しみなく<sup>うば</sup>奪う」、デカルトの「我思う、<sup>ゆえ</sup>故に我在り」、新約聖書の「<sup>ふえふ</sup>笛吹けど<sup>おど</sup>踊らず」、ルソーの「自然に帰れ」、シーザーの「さいは投げられたり」、「ブルータスよ、おまえもか」、シェークスピアの **To be or not to be, that is the question.**、など良く知られている。物の見方や考え方も共通するものも多く、学生時代に英語における<sup>ことわざ</sup>諺を調べている時に、洋の東西を問わず、人間は同じように考えるものだと感心したことがある。例えば、「ローマに行ったら、ローマ人のようにせよ」は、「<sup>ごう</sup>郷に入っては<sup>ごう</sup>郷に<sup>したが</sup>従え」、**It is no use crying over-spilt milk.** は「<sup>ふくすいぼん</sup>覆水盆に<sup>かえ</sup>返らず」、ヒポクラテスの「芸術は長く人生は短し」は「少年老い易く学成り難し」など、非常に良く似ている。もちろん翻訳によって入っているものも多いと思われるので、それぞれの出典を調べてみないとどちらが先なのか分からない場合も多い。例えば、**Rolling stones gather no moss.** と「<sup>てんせきこけ</sup>転石苔を<sup>む</sup>生さず」、**Time flies like an arrow.** と「<sup>こういんや</sup>光陰矢の<sup>ごと</sup>如し」などはどう見ても翻訳臭い。それはともかくとして、今でも残っている有名な表現には、

昔の人の叡智が凝縮されているので、特に人生・人間性に関する鋭い洞察に充ちていると言える。

私が昔から好きなのは、「小人閑居して不全を為す」とか「一炊の夢」また上記の「光陰矢の如し」などで、自分が、仏教の諸行無常、人生が如何に短いかという見方に影響されていることが分かる。その他に、「今浦島」とか「一期一会」とか「去るものは日々に疎し」など、海外生活の長い自分の経験から本当にそうだなと思いつけるものも多い。

私は、中学・高校時代から漢文・漢詩が好きだったので、今でもいくつか覚えているものがあるし、その中に出てくる表現には、今の言葉で「カッコいい」ものがあった。「異客」は王維の「獨在異郷為異客」(ひとり異郷に在りて異客と為る)が出典であるそうだが、自分の人生にぴったりのような気がして、気に入っている表現である。ちょっと「いいカッコいい」かなとも思うが。また、詩経「他山之石・可以攻玉」(他山の石・以って玉を攻く可し)に出てくる「他山の石」、陶淵明の「桃源郷」、唐書にある「日暮れて途遠し」、孫子の「呉越同舟」、無門関「羊頭狗肉」など、自分の気に入っているものの中に入る。

このように自分の嗜好を見てみると、中国の古典の中の「人生のはかなさ」を詠ったものに共鳴を覚えていることは明白である。これは自分の育った時代・社会背景に影響されたものであろうが、中学から高校時代、厭世観に苛まされて、禪宗の坊さんになろうと禪寺

の門を 叩いた経験もあるほどである。中国の古典の中でも「三国志演義」や「紅樓夢」などを読み、平家物語の「盛者必衰」、「奢る者久しからず」、「兵どもの夢の跡」、滝鍊太郎の名歌「荒城の月」、杜甫の春望という詩の中の「國破山河在・城春草木深」（國破れて山河在り・城春にして草木深し）からの引用「國破れて山河あり」、淮南子にある、「一葉落ちて天下の秋を知る」などに共通する心は、やはり、李白の「光陰者百代之過客（なり）」であろう。それゆえ、もっと威勢のいい格言や名言は自分の「座右の銘」にはなっていない。例えば、「青雲の志」、「大器晩成」、「天長地久」、「登竜門」、「滔天の勢い」など。もっとも、このような希望に満ちた前向きな表現は、あまり多くない。やはり、人生の終わりに近づき、振り返ってみての感慨を込めたもの、また、自己の反省に基づいて後世の人を戒めたものがほとんどである。特に、逆境における故事の中の、「四面楚歌」（史記）、「錐股の勉」（戦国策）、「髀肉之嘆」（三国志）、「粉骨碎身」（証道歌）、「自業自得」（正法念經）、「一敗地に塗る」（史記）、「臥薪嘗胆」（史記）、「同病相憐れむ」（古詩）などはよく使われる表現である。

こういう故事や諺の中には、よく誤解されるものもある。すぐ頭に浮かぶのは、「情けは人の為ならず」、「李下に冠を整さず」、「君子は豹変す」（易経）、「宋襄の仁」（十八史略）、「朝令暮改」（後漢書）などは、よく新解釈が取り上げられて、話題になる。

日本語の諺の中にも人生の機微をついたものが数多くある。私の好きなものを拾ってみ

ると、「会うは別れの始め」、「雨降って地固まる」、「金の切れ目は縁の切れ目」、「好事魔多し」、「紺屋の白袴」、「親しき中にも礼儀あり」、「住めば都」、「大山鳴動してねずみ一匹」、「習うより慣れろ」、「三つ子の魂百までも」、「昔取った杵柄」、「六十の手習い」。

ここにあげたのは、もちろん、数多くの故事・名言・諺のごく一部である。初めにも書いたように、自分が気に入っているものを列挙してみると、自身の価値観や、行動規範がその中かなり明確に現れているように思う。皆さんの場合はどうであろうか。日本においては脱漢語化の傾向が非常に強くなって、若者たちは、前の世代の人よりこういう表現に接することが少なくなっていると思われる。日本に帰って大学生に話をしているとかなりの世代間のコミュニケーションの断絶を感じる昨今であるが、中国や日本の先人たちの人生に対する教訓・警句・価値観が珠玉のように凝縮したこのような表現を学ばずに、同じような過ちを繰り返すとしたら、それこそ貴重な時間と人生を無駄にすることになるのではないだろうか。私も「成年老い易く学成り難し」を「頂門の一針」として、「五十の手習い」を始めている。

2003年12月31日

トロントにて

太田徳夫

© Norio Ota 2004